

分野別講座「課題のある子の学力づくり」

参加者13名 まとめ 福原 慶子

●提案 岸本 ひとみ

を生かした学級経営をする。

それぞれの特性に応じて

多動の子には席の工夫が必要だ。離席するなら、教師の目の前の席にするか、3人席の真ん中にする。その際は、他の子も3人席にする。何かを触っていないと落ち着かないので、指つぼグッズをお道具箱に入れておき、いつでも握れるようにしておく、気も紛れる。

自閉症スペクトラムの子には、まずこだわりを認めるようにする。逃げ場を確保し、落ち着く場所を認める。しかしいつまでもいいように、タイマーを渡し「(授業にもどれるまで)何分いりますか?」といった声かけもする。人間関係の配慮も必要で、隣の席はなるべく理解のある子にする。

LD傾向の子は、苦手な分野が特定しているので、逆に得意分野

授業中での配慮

黒板をパターン化すると、どの子も安心する。国語では、めあてとゴールをはじめに書く。算数では、黒板を三分割し、左から集団思考、皆で解く、個人で解く、というように使い方を決めておく、と終わりが分かりやすい。

最近では特に、体づくりがとても大切だと考えている。体幹を鍛えることで、他のこともできるようになる。究極は縄跳びではないか。

みんなができるようになる為に、マットならマットの時だけ取り組むのではなく、授業の中で少しだけ、長い期間取り組むようにするとよい。自己肯定感を育めるように、教師が手立てを講じることが大切だ。

分野別講座「どの子も伸ばす図工・高学年」

参加者10名 まとめ 福原 慶子

●提案 丸小野 聡暢

高学年になるといやがる子が増える図工。教室に飾った時に、遜色のない作品を描かせるにはどうすればよいのか。

教師がまず心がけたいのは、評価だ。うまい下手ではなく、指導したことができているのか、到達度評価をすることだ。例えば、ぼかしを指導したなら、ぼかしができていのかどうかを評価する。

何枚か絵を見たが、とても小学生が描いたと思えない仕上がりがだった。その描き方は次のようであった

① 課題をはっきりと伝える  
何を描くかはっきりと伝える。個人の思いは、絵や色に自然と現れる。

② 下絵を描く  
構図となる写真を撮り、その写真を十六分割し、画用紙も同じように分割をする。一番目線に近い所から、遠近法を教えながら描かせる。縦線は、画用紙の下の辺に

対して必ず垂直にすると、そんなに変にはならない。多重線でのささっと描かせ、その線は後に動きとなるので、消さずにペンでなぞる。ペンも多重線が良い。

③ 下塗りをする  
筆以外のアクションをつけるため、青か黄かオレンジのアクリル絵の具をローラーで全体に塗る。

④ 光の指導  
光は左斜め上から指しているとした方がわかりやすい。一番暗くなる所を全体指導してから、ベースに黒を混ぜて塗らせる。

⑤ 色塗り  
水彩絵の具を、点々塗りしていき、やり直しも追加もできるので、あまりこだわらずに塗らせる。補色についても指導し、一番目立たせたい所にその色を使わせる。

指導することはたくさんあるが、どの子も自分の思いを絵に表していた。遜色のない作品で、満足気な子どもの様子が目に浮かぶようだった。